

## 近代日本における骨相学のカルトグラフィー (1)

### The Distribution of Phrenology in Modern Japan (1)

平野 亮\*

HIRANO Ryo

本研究は、近代日本における Phrenology(骨相学)の流入・受容・展開の様相を諸史料に即して素描することを目的とする。骨相学受容の形態には、ある知を骨相学と知りながら受容した形と、それが骨相学に関連するとは知らずに受容した形があったが、本稿は前者について歴史的に調査・検討し、その結果を2本に分けて報告する第1報である。西洋由来の脳科学 Phrenology は、幕末から明治大正期の近代化の過程で日本に流入し、「骨相学」をはじめとした多くの語に翻訳され受容された。葵文庫や内閣文庫にも骨相学の専門原書が所蔵されており、初期の流入を跡付けられる。1900年頃には日本人による骨相学書が増加するが、その頃には骨相学の“小ブーム”とも呼べそうな局面を、著作や新聞記事、雑誌記事、広告などから観察することもできる。西洋化を押し進める近代日本に都市化が進行する中で、そこに生きていく人間がお互いを、そして自分自身を理解するための術・知として、或いはめまぐるしい社会情勢変動の中で揺らがない人間本性を解明する経験科学として、骨相学が求められたということなのだろうか。

キーワード：Phrenology, 骨相, 翻訳, 近代化

Key words : phrenology, 骨相 (Kossō), translation, modernization

#### はじめに

19世紀の西洋世界で一世を風靡した「骨相学(phrenology)」は、近代日本にも流入していた。しかも、定着や常識化とまでは言えなくとも、その存在や語彙が相当程度に広がり人々に共有されていたらしいことは、当時の様々な史料から跡付けることができる。さて、そのような骨相学受容の歴史的様態には、およそ2通りあった。一つは、ある知をそれが骨相学と知りながら受容した例。もう一つは、それが骨相学に関連するとは知らずに受容した例である。教育史の視点から興味深いのは、これら2通りの仕方でも流入・受容した骨相学の理論や考え方が、明に暗に、日本の「近代教育」の形成にも荷担し、その文化的・思想的一部を成してきたらしき点である。

本研究は、(1)と(2)の2報に分けて、以下にも参照するようないくらかの先行研究でのみ示唆されてきた、近代日本における骨相学の流入・受容・展開について、諸史料に即して素描する。特に、上記受容の一つ目の仕方に焦点を絞り、骨相学そのものが明治大正期のどのような分野、どのような人物により受け取られ展開されたのか、その“分布”を描き出すこと(カルトグラフィー, cartography)を目的とする。本稿(1)では、とくに骨相学の翻訳語と書籍について、そして“骨相”に関する知の系譜とそれをめぐる近代的状況について検討する。

#### 1. 骨相学の翻訳語と書籍

最初に、1898年6月27日の東京朝日新聞朝刊に掲載されたコラムからの引用を見て欲しい<sup>1</sup>。

○フレノロジー 即ち骨相学といふより妻に惚き人をサイノロジーの先生と異名すると近来一般に流行す内地雑居も近づきたれば追々に芸妓に惚けたるをゲイノロジー娼妓に惚けたるをジョロノロジーなんどともいふべくや

内地雑居の実施も近づく折、妻にのろける夫を「骨相学」の原語である「フレノロジー」にかけて「サイノロジー」の先生と呼ぶとしたら、芸者や遊女(女郎)に入れあげるともがらは「ゲイノロジー」や「ジョロノロジー」などとバタ臭く呼ばれるようになるのかしら、というこのユーモアを、現代の日本人は別段面白いとは思うまい。言葉遊びのもとになっている「フレノロジー」の語も内容も、今や世間に殆ど知られないからである(当時とてどれほど「面白い」記述であり得たかという論点もあるが)。しかしとにかくも、この記者は「フレノロジー」を選んだ<sup>2</sup>。少なくとも120年前の日本の新聞読者にとって、「骨相学」あるいは「フレノロジー」の語が決して馴染みの薄いものではなかったということがこの記事から推察されるのである<sup>3</sup>。

幕末開化期から明治時代を通じて、どのようにして Phrenology が日本に流れ込み、広がっていったのだから

\* 兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻教育コミュニケーションコース 准教授

令和元年10月25日受理

う。明治末にあっては、教育学者・横山栄次（1908）が、「我が国でも御承知の通り骨相学と云ふものは早くから伝えられ」<sup>4</sup>と述べ、医学者・富士川游（1910）が「〔理論の創始者である〕ガル以来種々の人に依って骨相学を伝えられた」<sup>5</sup>と論じた。その実相について確認してゆく。

### (1) Phrenology の翻訳

はじめに、西洋の Phrenology がどのような日本語に翻訳されたのかについて、これまで筆者（2015）<sup>6</sup>や長沼美香子（2017）<sup>7</sup>が明らかにしてきたところに、いくらか新しい情報を加えて紹介する。中には、本のタイトルや項目名でのみ使用されたものも含まれており、それを「翻訳語」と呼ぶには相応しくないおそれもあるのだが、今後の史料調査の便のためにも、ここでは対象とし挙げておくことにした<sup>8</sup>。

まず、今日普通に用いられる翻訳語は「骨相学」である。Phrenology に「骨相」の語を充てたものでこれまで確認された最も古い例は、1873年刊行の文部省百科全書『教導説』巻末に掲載された目録中の「骨相説」<sup>9</sup>、或いは、同年刊行の柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』の「骨相学」<sup>10</sup>である。そして、医学者・長谷川泰の翻訳になる1876年刊行文部省百科全書『骨相学』<sup>11</sup>が今日の固定的翻訳の直接の起点となったと目され、以降、「骨相学」が用例数としても最も多く、辞典等にも第一に採用される一般的訳語となった。しかしながら、「骨相論」（1881）<sup>12</sup>や「骨相術」（1889）<sup>13</sup>などのバリエーションも見つかる一方、長らく“唯一の翻訳語”の地位には至らなかったことは、以下に見てゆく通りである。

たとえば Phrenology の理論面に順った場合、「脳」に関わる翻訳語が選択されることになる。理論のオリジナルを提唱した18世紀末のドイツ人医師 F・J・ガル（Franz Joseph Gall）は、自身の説を「脳・神経系の解剖学及び生理学（Anatomie et Physiologie du système nerveux en général et du cerveau en particulier）」<sup>14</sup>と称した。つまり、骨相学は「脳神経科学」の一だった。そこで翻訳語が「脳学」の類いとなる。

医学者・島村鼎甫によるオランダの医師 D・ルバッハ（Douwe Lubach）著『人間の自然学に関する第一原理（Eerste grondbeginselen der natuurkunde van den mensch）』（1855）の翻訳『生理発蒙』（1866）は、「呀縷」自身ではなくその学説の信奉者たちが名付けたという Phrenology を、「相脳学」と翻訳した<sup>15</sup>。西周（1871頃）は、学説の中身に正確に即して、「脳学」と訳出して見せた（そしてそれを「性理学（Psychology）」の下位分類に位置づけた）<sup>16</sup>。また、文部省で洋書の翻訳に従事していた木村一歩（1882）は、教育辞典の共訳者・小林小太郎が先行して「骨相学」と翻訳していたものを、意図的でもなさそうだが、「察脳学」と訳し替えている

<sup>17</sup>。さらに、脳を構成し各種機能を司る各器官（organ）の発達差が頭蓋の形状を決定する、という骨相学の主旨に順えば「脳髓機能論」（1925）<sup>18</sup>となり、『和訳字彙—ウェブスター氏新刊大辞書』（1900）の「脳蓋学」にも得心がゆく<sup>19</sup>。より即物的な印象の「相骨論」という表現も見られた<sup>20</sup>。

語の組成に注目すると、古代ギリシャ語の「phren（プレーン）」、つまり「横隔膜」が出現する。この組織は、『イソップ物語』<sup>21</sup>やプリニウス『博物誌』<sup>22</sup>などを通じて知られる通り、古代から思考や感情の座と考えられてきた。そして、「Phrenology は真の脳の生理学であり、真の心の哲学（philosophy of the mind）である」<sup>23</sup>という19世紀人の言葉にも明らかのように、Phrenology 即ち“横隔膜のロゴス”の意味するところは“心理学”であった。そこで、「心学」などの翻訳語が生まれることになる。

医学辞典『袖珍医学辞彙』（1886）は、Phrenology を「心学」「横隔膜学」<sup>24</sup>と翻訳した。「心学」は、1873年に前出の『英和字彙』が早くも「骨相学」と併記して載せており、更には、その前年刊行『英和掌中字典』に見られる「シンカ」<sup>25</sup>も「心」のことだろう。また、英国在留時に骨相学を学んだという高橋邦三（1899；1908）<sup>26</sup>は、「生理心学」「生理心理学」「生理的心性学」を、「骨相学」よりも日本語として内容的に正確であると主張して用いた。

観相学に準じた訳語もしばしば採られた。「骨相学」自体にもその語感は十分だし、単なる人相学・観相学、また「欧米人相学」（1885）<sup>27</sup>や「西洋人相学」（1890）<sup>28</sup>、時に「観相奇術」（1890）<sup>29</sup>などとも表現された。なかでも、当時、特に法曹や警察関係者に支持者を獲得し、安定的な Phrenology の訳語の一つとして流布したものに、観相家・石龍子（5代目）による「性相学」（1902）<sup>30</sup>があった。高橋邦三の下で骨相学を学んだ英学者・永峰秀樹も、英国最大の骨相学者ジョージ・コム（George Combe）の著 *A System of Phrenology*（5th ed., 1843）を翻訳した際に、この訳語を採用した<sup>31</sup>。

以上の他には、冒頭に引用した新聞記事の例にも見られるように、そのまま「フレノロジー」「フリノロジー」「フレノロジー」<sup>32</sup>などと片仮名書きするもの、「フレノロジー術」（1891）<sup>33</sup>「フレノロジー学」（1892）<sup>34</sup>といったバリエーションも散見される。逆に、「骨相法」（1900）<sup>35</sup>や「骨相運命学」（1916）<sup>36</sup>のように名乗っているからといって、Phrenology（の翻訳語）ではない例もまま見つかるし、『日本国語大辞典』に「骨相学」の初期用例として挙げられた『生物学語彙』（1884）<sup>37</sup>の場合は、実際には Osteology（骨学）の訳語であった。また他方、井上円了「骨相論」（1900）<sup>38</sup>や糸左近「骨相法」（1906）<sup>39</sup>などのタイトルの含意は、「東洋の人相術」と「西洋

の骨相術」の両方を指すことであり、すなわち「東西骨相学」(1931)<sup>40</sup>を意図する、といった具合であった。骨相学の史料を調査・読解するには、以上のような翻訳語に注意を払う必要がある<sup>41</sup>。

## (2) Phrenology 関連の原書と翻訳書

19世紀の英米やフランスでは、骨相学の専門書籍・論文が膨大に発行された<sup>42</sup>。そういった原書群は日本に伝わっていたのか、翻訳書を含めてそれらは出版・流通したのか。これらの問いに答えるための体系立った調査は今後の課題であるが、ここではひとまず作業の途中経過を報告しておく。

まず原書について、推定される流入時期が最も古いものでは、第一に江戸幕府旧蔵資料の *The Principles of Physiology* (1855) が挙げられる<sup>43</sup>。著者は、ベルギー王レオポルド1世の侍医も務めた医師でありながら骨相学会会長も務めたスコットランドのアンドリュー・コム (Andrew Combe) である。葵文庫に収められる本書は、生理学全般を扱っており、骨相学の知見はその一部に引かれる。内表紙に「外国方」(1858-67頃)の判が押され<sup>44</sup>、本文には当時の学生たちによるものと思われる書き込みが見つかる(図1)。

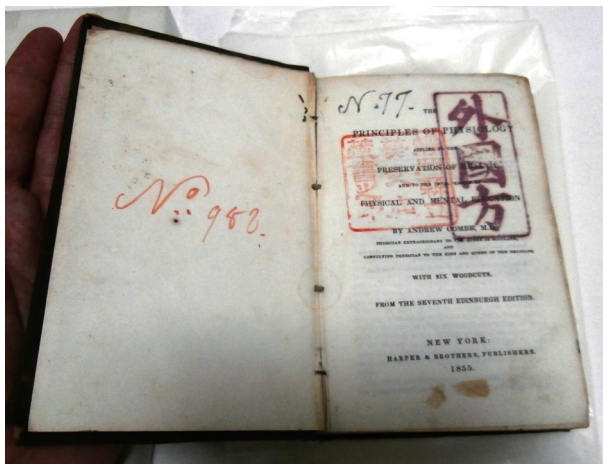


図1 葵文庫所蔵の A. Combe, *The Principles of Physiology* (1855)  
(静岡県立中央図書館にて、2019年9月27日筆者撮影)

同様に、幕府旧蔵資料をベースとする内閣文庫にも、いくつかの骨相学関連書が見つかる<sup>45</sup>。先行研究でも検討されてきた文部省百科全書の原典 *Chambers's Information for the People* や A・コム著 *The Management of Infancy* (1871)<sup>46</sup> の他に、G・コム著 *Remarks on the Principles of Criminal Legislation* (1854)<sup>47</sup> や骨相学者サミュエル・R・ウェルズ (Samuel Roberts Wells) 著 *New Physiognomy, or, Signs of Character* (1870) といった、骨相学的知見に基づく専門書が所蔵されている。

図書館蔵書目録にも目を向けてみよう。そこからは、

「骨相学」なら「骨相学」の書籍が、どのように分類・収蔵されているかが分かり、併せて経年変化を追えば、如何なる蔵書・コレクションがどのように形成されていったのかを察知することもできる。

ここでは、第二次大戦前唯一の国立図書館だった帝国図書館(1897年改称、設置)の蔵書目録を例に見てみる(表1, 2)。最初の洋書目録には、「Phrenology」の見出し項目(ジャンル名)が存在し、しかもそれは「教育」を含む巻(『哲学・心理・倫理・論理・教育』1899)にのみ設けられていた<sup>48</sup>。洋書目録は分野別で6巻あり<sup>49</sup>、ジャンルごとに設けられた各見出しと巻末の著者索引を用いて検索する「<sup>チェックノリ、カテゴリー</sup>字書体」の体裁を採っている。つまり、当初から Phrenology は「心理」や「教育」のカテゴリーに分類されていた、ということである。

さて、その「Phrenology」には、表1に示す通り、3冊の文献が記録されていた。一見して僅少だが、実際にはその他のジャンルに実質上の「骨相学書」がカテゴライズされている例もある。そこで、今回は試みに、日本の教育事典に骨相学関連語彙の出現状況を調査した筆者自身による先行研究(2016)<sup>50</sup>に準じて「Phrenology」「Gall」「Spurzheim」「Combe」の4語と、更に本調査を通じて挙げられた「Fowler」「Sizer」「Wells」の3語を新たに加えて検索した。表1は、その結果を示したものである(ここでもまた不完全な調査に留まっているため、骨相学書と呼び得る文献が他にも所蔵されている可能性がある点を断っておく)。

とは言え、そうしてリストアップされた「Phrenology」の3冊以外の文献は、選書の段階では骨相学の専門書としてではなく、医学や家政学、犯罪学などへの関心から各領域の専門書として収集されたものだったはずである。この点には留意しておきたい。「はじめに」で述べた流入・受容の仕方の2つ目(骨相学と知らずに骨相学的術・知を受容した例)にも関わるその事柄は、骨相学の流入には、その応用的側面に注目した各種専門領域——近代日本に興りつつあった異文化的な西洋の諸科学——の有したそれぞれの動機が強く作用していた、という事態をよく表わしている。要するに、近代化のなかで各専門領域がどのような知を求め、骨相学がそこにどう関わっていたのか、ということを知る手がかりがそれらの書目であるということ。それは同時に、近代日本の専門科学の歴史を考察する端緒ともなり得るのである。

例えば、橋本美保(1998)の整理した「官立長崎師範学校所蔵の西洋教育書」リストに、「サイゼルス」著「ハウツー、チャーチ」がある<sup>51</sup>。これは、表1の「Method of Teaching (教授方法)」にも記載されていた米国の骨相学者 N・サイザー (Nelson Sizer) の著 *How to Teach, According to Temperament and Mental Development* のことであり、その実は、徹頭徹尾、骨相学的教育論の書であっ

表1 1900年頃の帝国図書館所蔵の骨相学関連の洋書<sup>a)</sup>

巻 <sup>b)</sup>	見出し	書目	著者	刊行年
A	Phrenology	Phrénologie spiritualiste, nouvelles études de psychologie appliquée	Michel-Arthur Castle	1862
		Lectures on phrenology	George Combe	1871
		Practical phrenologist	Orson S. Fowler	記載なし
	Education	Education, its principles and practice (*)	George Combe; William Jolly ed.	1879
		Education: its elementary principles, founded on the nature of man (*)	J. G. Spurzheim	1883
	Home and Early Education	A management of infancy, physiological and moral (*) <sup>c)</sup>	Andrew Combe <sup>d)</sup>	1871
	Man	On the constitution of man (*)	George Combe	1864
	Self-education	Education and self-improvement (*)	Orson S. Fowler	1874
	Ethics, practical	Choice of pursuits; or, what to do, and why (*)	Nelson Sizer	1885
	Method of Teaching	How to teach according to temperament and mental development (*)	Nelson Sizer	1883
Psychology	A manual of mental science for teachers and students (*)	Jessie A. Fowler	1879	
B	Marriage	Marriage, its history and ceremonies (*)	Lorenzo N. Fowler	記載なし
		Wedlock; or, the right relations of the sexes (*)	Samuel R. Wells	1872
C	Architecture and Building	Home for all or the gravel wall and octagon mode of building (*)	Orson S. Fowler	1880

<sup>a)</sup> 書名末尾に(\*)を付したものは、“Gall”“Spurzheim”“Combe”“Fowler”“Sizer”“Wells”の検索から抽出されたものである。

<sup>b)</sup> 所収巻は、以下の通り記号化して示した。

A：帝国図書館編『帝国図書館洋書目録—哲学・心理・倫理・論理・教育』帝国図書館，1899年。

B：帝国図書館編『帝国図書館洋書目録—政治・法律・経済・社会・統計』帝国図書館，1898年。

C：帝国図書館編『帝国図書館洋書目録—農業・商業・工学・美術・工芸・陸軍・海軍』帝国図書館，1901年。

<sup>c)</sup> 『帝国図書館洋書目録—理学・数学及医学』（1903）の見出し項目「Children, care of」（p.48）にも出版地の異なる同書が掲載されている。

<sup>d)</sup> 人名索引の「Combe, G.」は「Combe, A.」の誤植である。

表2 1900年頃の帝国図書館所蔵の骨相学関連の和漢図書

目録名および分類名	書目	著者・編者・訳者	刊行年
分類目録, [哲学—術数(相法類)]	骨相学[百科全書]	チャンパー著, 長谷川泰訳	記載なし
	図解欧米人相学	フアウラー 寶列爾著, 三橋村雄訳	1884
	フレノロジー講義全書	佐藤正道著	1891
増加書目録, 件名「骨相学」	易占及骨相法	博文館編	1900
	骨相学之応用	市川紀元二著	1900
	骨相心理学応用自己及児童教育	市川紀元二著	1901
	骨相学之理論観	市川紀元二著	1902
	人心観破 骨相術自在	田中鼎[仙樵]著	1903
増加書目録, 件名「性相学」	性相学精義	石龍子著	1902

た<sup>52</sup>。教育学もまた骨相学を運搬する乗り物ないし通路となっていたわけだが、では教育学はこのときこの書に何を求めていたのだろうか。そのような批判から展開される分析・考察は、日本の近代教育思想を解明してゆく一つの手がかりを与えてくれるのではないだろうか。この辺りの事情については、稿を改めて論じるとしよう。

他方、翻訳書については、まず表2に記載された最初の2冊が挙げられる。英国民衆のための「知識」をコンパクトにまとめた百科事典 *Chambers's Information for the People* (初版は1833-35年刊) 所収の1冊 *Phrenology* を翻訳した『骨相学』と、アメリカの骨相学者O・S・ファウラー (Orson Squire Fowler) の著 *The Practical Phrenologist* (1869) を翻訳した『図解欧米人相学』である<sup>53</sup>。またそれ以外にも、今回参照した目録にはなかったが、次の2冊の存在も確認された<sup>54</sup>。

○ジュウゼツプゴール氏『フレノロジー術』(松田松樹訳述) 松田丈吉, 1895年。

○コム氏『性相学原論』(松軒翁訳) 三星社, 1917年。同, 洗心堂, 1918年。

ただ、断っておかなければならないが、『フレノロジー術』は実際には翻訳書ではない。所謂ところの「訳述」書であって、しかも「ドクトルジュウゼツプ, ゴール氏原著」(1頁)とあるものの、ガル以降に加えられた知見に基づいて執筆されており、下敷きがガルの著作でさえないことは中身に目を通せばすぐに判明してしまう<sup>55</sup>。それでもなお、本書はガル(ゴール)を著者と明記した唯一の日本語本であり、“ガルの著作”として当時の朝日新聞<sup>56</sup>や子供向け雑誌『少年世界』(図2)<sup>57</sup>にも広告が打たれていた点で見逃せない。

ところで、表2「和漢図書」に挙げられた他の骨相学文献は、すべて日本人の著作であった。1899年末時点の分類目録と1900～04年分増加書目録からは、1899年に3冊(うち2冊が上述の翻訳書)だった「骨相学」文献が1903年までに6冊追加され、合計9冊のコレクションに成長していったことが分かる<sup>58</sup>。それらの書の多くが日本人の手になるという事実は、当時の骨相学をめぐる日本の状況を考察する上で、注目すべき点であろう。

## 2. 骨相学の小ブーム

### (1) 骨相学は流行ったか

骨相学は日本でも流行したのか。その質問には、“近代日本には西洋のような大ブームはなかった”と答えるのが適当だろう。だがそうであっても、史資料の中に、“小ブーム”と呼べそうな局面を観察することはできなくもない。二つの異なるレセプターから検討してみよう。

ある夜、睡眠中に妻の枕に擦って剃髪したての坊主頭を痛めた南方熊楠(1912)は、翌日の日記に、痺れた頭部位は「Websterの字書骨相図にLove of Approbationとある処ろ」だと、わざわざ自筆の絵まで添えて、説明した(図3)<sup>59</sup>。20年以上英米に研究生生活を送った学究・熊楠である。骨相学のことは無論知っていたとして、その知をこのように個人的に活用していたことが面白い。かく例のように、第一の受容レベルは、知識人や近代社会を牽引した者たちと骨相学との関係史である。

例えば、哲学者・西周による前述の翻訳語「脳学」は、西洋科学万般(encyclopedia, 即ち百学連環)を説く彼の講義の中で用いられ、教え子たちに伝播しただろう。作家の芥川龍之介(1917)は、ある日の午睡のあと、訪ねてきた画家の友人による彼への骨相診断で盛り上がった<sup>60</sup>。阪急グループ創始者の小林一三(1903)が骨相学の講演を聴けば<sup>61</sup>、第一生命保険創業者の矢野恒太(1917)が「西洋の骨相学者」に骨相を採点される<sup>62</sup>。突然職場に現れた「骨相学者」に対して、見料を支払って診断を受けたドイツ文学者・成瀬無極(1925)の回想もあれば<sup>63</sup>、一喝して相手にしなかった政治家・大隈重信の新聞記事(1914)もある<sup>64</sup>。柳田國男の兄で国文学者かつ医師の井上通泰(1917)は、石龍子による骨相診断にまんざらでもなかった<sup>65</sup>。「所謂人相学に於て四肢の長短を計り頭腦の凸凹を按じて其人の特性を判断するが如き誠に根拠もなき妄言」と述べたのは福澤諭吉(1897)だったが<sup>66</sup>、一見痛烈なその批判も、それに続く「時として事実当たることもあれば全く之を抹殺す可らず」を読む限り、「僕自身も一時骨相学に大に熱った」と語った新渡戸稲造(1917)による骨相学評——「あながち荒唐無稽の愚説として排除せず、一と通り耳を傾けるのも何かの参考になると信ずる」——に共通する態度があったことが分かる<sup>67</sup>。

乱脈のうちに幾例かを列挙したが、「文明開化」を使

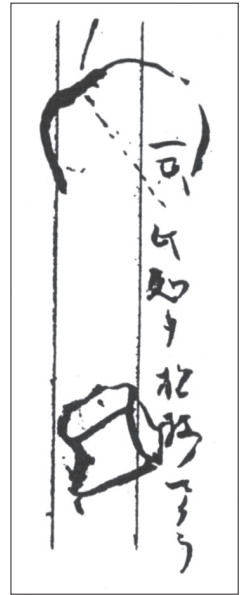


図3 熊楠自筆骨相図(1912年11月12日分日記より)

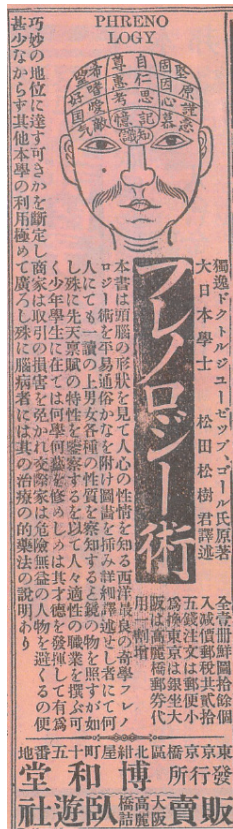


図2 『少年世界』(4巻13号, 1898)掲載の広告

命とした当時の“学徒”たちにとって、骨相学は全く知らずに通り過ぎることは叶わない、または留保を与えて少なくとも一顧だけはしておくべき、西洋知の一つであった。それが、“歴史上の偉人”たちの周辺に、上記のような“骨相学の思い出”を生じさせたのである。

さて、第二の受容レベルの話に移る前に、日本における“骨相に関する知”の系譜を簡単に押さえておく。

もともと骨相学的な発想が、Phrenology 以前の日本に存在しなかったわけではなかった。“骨の相”がその人についてのなにがしかの真理を語る、といった観相術的発想なら殊更古く、それは大陸から伝来した術・知に由来する。古代中国では、気質、運命を表徴の観察から読み解く相法が行われていたが、こと「骨相」に関わる体系的記述としては、1世紀に著わされた『論衡』中に「骨相篇」がある。「相は人にあり、人は相にあり」と言われるが如く、異相の傑人として伝わる倉頡（伝説上の漢字の創始者。黄帝に仕えた。）や高祖劉邦（206-195BC）らの面相が論じられる<sup>68</sup>。『史記』や『後漢書』の時代には既に存在していた観相の専門家「相工」は、唐の時代には「天下国家の大事まで見通す予言者」として敬われるようになっていた<sup>69</sup>。

“骨相”に関する専門的術・知は、それを持った渡来人らにより、古代の日本にもたらされた。日本最古の漢詩集『懷風藻』（751）が伝えるところによると、大津皇子の謀叛（686）の発端も、皇子の「骨法」すなわち骨相を読んだ新羅出身の僧・行心が、皇子を焚きつけたことにあった<sup>70</sup>。平安中期の漢詩文集『本朝文粹』（1030頃）にも、人間の資質や運命を判断する徴としての「骨相」が論じられている<sup>71</sup>。また、史料の百科事典たる『古事類苑』を繙くと、『懷風藻』には更に「風骨」の用例があったことも知れ、日本独自の観相学が成立した江戸後期の史料には、「骨体」（原念齋『先哲叢談』）や「骨格」（石龍子『神相全編正義』）、「骨相」（家田大峯『随意録』）など、類似語彙も含めた用例を拾うことができる<sup>72</sup>。「骨相」そのものは、用例のあまり見つからない語である。だが、万葉集の時代から「天骨」という言葉でも言い表されてきた、人の本性や運命を標す「骨」とその「相」に対する関心は、日本の様々な時代に跡づけることができるのである<sup>73</sup>。

そして近代以降もまた、日本人にとって“骨相”は身近だった。例えば、明治時代の落語の演目に「三味線栗毛」がある。そこでは、「盲人」の「按摩」がうらぶれた大名の晩成をその“骨相”から予言するシーンが、噺の一つのハイライトとなっている。ところで、この噺の最初期の筆記録を確認すると、「体格（さう）」という言葉がそこに充てられている<sup>74</sup>。言うまでもなく、ふつう落語の言葉は耳で聴かれる。つまり「さう」＝「相」と言えば、当時の聴き手には意味が伝わったのであり、

それを速記者が書き起こしたものが「体格」や「相貌」であったに過ぎなかった。これ即ち、表徴としての“骨相”が、庶民のあいだの文化的共通理解として存在していたことを言う所以である。

骨相学が、その性質上、以上のような“骨相に関する知”とは一線を画するものであったことは論を俟たない。然るに、第二のレベルはそのような伝統を土台の一部とする、骨相学の大衆的・通俗的局面である。

まず、「観相学」や「観相見」が、明治大正期の日本社会に流行したことがある。参考になるのは、東京朝日新聞社に入社して間もない頃の漫画家・岡本一平の作品、「流行もの二題」（1912）である（図4）<sup>75</sup>。観相家とそこに群がる人々を描いた画に添えられた解説によると、当時、通りの商店がつぶれると、次の大きな店が入るまでの間を縫うようにしてじきに「観相学士」が店を出す、という光景がよく見られた。彼の人は「骨相の理法」を語り、ナポレオンやら源頼朝やらの絵を思わせぶりに掲げたりし、それらしく飾り立てては人だかりができたのだという。



図4 岡本一平作「流行もの二題」の一。「観相博士」の貼り紙が見える。  
（東京朝日新聞1912年10月21日朝刊より）

ここに描写された「観相学」がどのような種類のものであったか、この記事だけでは判断できない。だが、明治文化研究の石井研堂（1944）による次の指摘を合わせて読めば、推論も可能だ。即ち、町の中では「西洋ばやりの結果、人相見さへ、西洋を冠する」という、そのような当代の風潮である<sup>76</sup>。石井は、「果たして西洋風の人相見か否か明かならざれども」と述べたが、彼らの中に“骨相学者”が混じっていた可能性は、先の翻訳語の検

討からも十分にあると言えよう。事実、恰もそれを裏付けるような証言もある。『人相読性術』（1918）の著者によると、「今では智識階級の各方面にも研究されるようになったが、中には性相学〔骨相学〕の看板をさげながら、生理解剖の一端も知らぬものが飯の為に愚民を迷はして居る」。それは、「此の学問が盛なればこそ」の事態、との由である<sup>77</sup>。

これが“骨相学徒”の言葉なれば、いくらか差し引いて読む要はあるかも知れないが、例えば一般的なカメラ・写真の専門誌（1905）が、骨相診断に適した良い写真の撮り方を指南する記事を掲載していた時代である<sup>78</sup>。そして、写真での鑑定やそれを宣伝する新聞広告<sup>79</sup>、読者の写真から骨相を誌上鑑定する記事<sup>80</sup>などが、実際に存在していた。こう見てゆくと、冒頭に引いたフレノロジーを茶化したコラムの出現も、やはり「此の学問が盛なればこそ」の事態と映る。「観相学」の流行があったとすれば、間違いなく、骨相学の小ブームもそこに位置を占めていたのである。

## （2）「近代」的な社会状況

では、骨相学が明治から大正にかけての日本にそれなりに展開し、或いは大衆的な小ブームの様相を呈していたのだとすれば、その原因は何か。その歴史社会的可能性のいくばくかを確認しておこう。

同じ問いに対する答えとして、西洋の文脈でしばしば指摘されてきたのは、“エトランゼの記号論”ともいべき技術の時代的要請である。例えば、フランス史の喜安朗（2002）は、革命以後のパリで骨相学が流行した原因を、流動化する当時の「都市」形成に見た。「かつての住民共同体は崩れていて、今や見知らぬ人間と出会い、人と人の絆を持たねばならない。このように変化する社会で、人々はまず相手の性格を判断する手立て」を欲する。その「手立て」が骨相学だった、という論理である。「この流行は群衆のパリを象徴する」一方<sup>81</sup>、同様の状況は19世紀前半の他のヨーロッパ世界にも生じており、教育史の立場から骨相学を研究した小松佳代子（1998）も、英国における骨相学普及の原因をそこに求めている<sup>82</sup>。「危険な階級」や「自由な労働者」の出現により、近代西洋における都市の“匿名化”は進行した。時代は下るが、1903年に発表されたG・ジンメルの論考「大都市と精神生活」が鮮やかに浮き彫りにした都市的状况が、既にそこに現出していた<sup>83</sup>。相互に“異邦人”であるそのような新環境のなかで、科学的な人間読解術が人々によって希求されたのである。

ここで注意すべきは、その“観察眼”が、何も三人称や二人称の人間にのみ向けられたのではなかったという点である。今や“未知”に対する眼差しは、自分自身たる一人称の人間にも／こそ向けられた。貴賤賢愚や

性、年齢等の別のない“私”の問題化は、王室から労働者、学者から無筆までを巻き込んだ、西洋における骨相学の広汎なブーム現象を見れば理解できる。民衆レベルでは、“私は何者であるか？”という問いは、「近代」と称される時代にあつて、個人的ベクトルと国家的ベクトルの両方が向けられる問題として先鋭化した。伝統社会において身分、家業、出身地などが強く有していた限定性が相対的に薄まってゆくにつれ、“自己”も含めた人間は、自分にとってますます“未知”となる。ポリスの関心は、その「個人」がどのような能力を持つのか、どのような危険性があるのか、といった点に向けられ、一方でそのような問いが“自己”にも内面化されていく。その意味で、小松も注目した“Know thyself（汝自身を知れ）”という、骨相学ジャーナルの表紙に印刷されていたかのスローガンは、まさに時代を象徴するキーワードであった。自分の「個性」を自問する。そのような心理的自己認識が、半ば脅迫的に強迫される社会状況下で、骨相学はそのプラクティカルな機能を発揮する場所を獲得したのだろうか。

一方で、歴史家のロバート・プロクター（1988）は、上記とは別の視角からの考察を行っている。西洋世界における18世紀末以降の政治情勢のめまぐるしい変化、そのカオス的社会的変動の渦中で、学者たちは人間本性についての「揺るがない何か」を探し求めていた。骨相学は、そのような期待に応えるかに思われた、当代の経験科学の一つだったというのである<sup>84</sup>。

近代日本におけるこれらの指摘の適合性はどうか。社会の仕組みや価値観の流動と転換という文脈は、18世紀末以降の西洋世界と19世紀後半幕末開化期以降の日本に重なる部分だろう。岩井洋（1997）もその『記憶術のススめ』のなかで、柳田國男『明治大正史・世相篇』を引証しながら、「ストレンジャーの吹き溜まり」となっていった近代日本の都市に暮らす「都会人の処世術」としての骨相学の可能性を指摘している<sup>85</sup>。とは言え、日本への骨相学の流入・受容は、西洋においては科学的評価が失墜していた19世紀後半以降、世紀転換期のことである。アメリカではなおファウラーらが精力的に普及活動に勤しんでいたものの、日本の近代化過程においてはかつての西洋においてそうであり得たような、確たる人間本性の科学たる地位が骨相学に期待されることはもはやなかっただろう。

それでも確かに、日本の骨相学関連の通俗的な広告や宣伝文句には、上述の分析と符合し、それを支持するように思われるものを認めることはできる。即ち、そこに謳われる“宙ぶらりん”状況への処方箋、「職業」「進路」「学校」「結婚」「人事」「交際」など“選択”の問題に対する骨相学の効用である。

以下の引用は、前述の『少年世界』に掲載された『フ

レノロジー術』の広告文の抜粋である(図2)。制度や文化の西洋化を推し進めた日本の近代化は、西洋固有の“問題意識”や“問題構造”までもセットで一揃い移植したのであろうか。

何人にも一読の上男女各種の性質を察知すること鏡の物を照すが如し殊に先天稟賦の特性を鑑察するを以て人々適性の職業を選ぶ可く少年学生に在ては何学何芸を修めしめば其才徳を發揮して有為巧妙の地位に達す可きかを断定し商家は取引の損害を免かれ交際家は危険無益の人物を避くるの便甚少ならず其他本学の利用極めて広ろし

### (1) のおわりに

幕末開化期から明治大正期にかけての Phrenology 受容について、本稿では、翻訳語・専門書籍・社会的流行の状況という観点から検討した。多種多数の翻訳語からは、当時の Phrenology 理解とレセプターを窺い知ることができる。少数ではあるが、早くから原書も輸入され、じきに日本人著者による専門書も出版されるようになっていた。近代日本の最初の体系的図書館蔵書目録に、「Phrenology」や「骨相学」の項目が設けられていたことは、本研究にとって興味深い事実である。骨相学の“ブチ・ブーム”とも呼べそうな事態が、そこには出来していたのかも知れない。或いは、敢えてそのような視点をとることで、“骨相占い”のような伝統もその土台の一つとした、骨相学の受容及び展開の「近代」的素地を、先ずは分析することができた。更なる考察は、次稿につづく。

次稿(2)では、とは言え「科学」であることが繰り返し強調された骨相学の、各種領域への広がりを描き出し、検討する。

### 註

- 「軒の玉水」東京朝日新聞、1898年6月27日朝刊、4頁(朝日新聞データベース「聞蔵IIビジュアル」より)。朝日新聞については以下同じ。
- 「サイノロジー」は実は今日の国語辞典にも載録される語だが、「サイコロジー(心理学)」をもじってできた語(大辞林)という説明は、本記事に照らす限り正確ではない。
- 英国でも骨相学大流行の折にはユーモアと諷刺の記事・図版が数多溢れていたという事実が、この理解の参考になるだろう。例えば、諷刺雑誌『パンチ』には、骨相学をもじった「腹相学」とでも訳すべき「ストマッコロジー(Stomachology)」なる記事が掲載され、遊ばれていた(“Punch’s Stomachology,” *Punch, or the London charivari*, 1841, p.232; 1842, p.50)。
- 横山榮次『教育教授の新潮』弘道館、1908年、118頁。
- 富士川游「人相と骨相(上)(心理学通俗講演会に於て)」ドクトル富士川游 読売新聞、1910年2月20日朝刊、5頁(読売新聞データベース「ヨミダス歴史館」より)。読売新聞については以下同じ。
- 平野亮『骨相学—能力人間学のアルケオロジー』世織書房、2015年。
- 長沼美香子『翻訳された近代—文部省『百科全書』の翻訳学』法政大学出版局、2017年。
- 国会図書館提供のサービス「国立国会図書館デジタルコレクション」<<http://dl.ndl.go.jp/>>(2019年10月25日閲覧可能)を存分に活用した。
- 『教導説』(箕作麟祥訳)下巻、文部省、1873年、巻末。
- 柴田昌吉・子安峻編『英和字彙』日就社、1873年、839頁。
- 『骨相学』(長谷川泰訳)文部省、1876年。
- 井上哲次郎『哲学字彙』東京大学三学部、1881年、67頁。
- 「骨相術の演説」読売新聞、1889年5月19日朝刊、2頁。
- “général et particulier (一般と個別)”という対比は、当時西洋の科学界でしばしば採用された視点であった(高橋巖・荒俣宏『神秘学オデッセイ—精神史の解読』平河社出版、1991年、92頁)。
- 李邈撰『生理發蒙』(島村鼎鉞仲譯)五松桜、1866年、23丁ウ。医学(生理学・解剖学)書をパスとした骨相学の部分的な早期流入は、他にも例があるのではないかと考えられる。日本の近代医学の形成にも影響を及ぼしたドイツの医学者C・W・F・フエラント(Cristoph Wilhelm Friedrich Hufeland)は、実際、その論文でガル学説が有する経験科学的側面を評価してもいた(“Bemerkungen über Galls Gehirnorganenlehre,” *Journal der practischen Arzneykunde und Wundarzneykunst*, Bd. 21, 1805, 3 Stück, S.114-158)。だが、その著 *Enchiridion Medicum* (1836) の訳書『医戒』(杉田成卿訳1849)——同じ邦訳に『扶氏経験遺訓』(緒方洪庵訳1857)、『察病亀鑑』(青木浩斎訳1857)、『扶氏診断』(山本致美訳1858)がある——に骨相学は論じられていなかった。その他、残念ながら今回調査できた『人身窮理書』(宇田川榕菴訳、19世紀前半)、『全体新論』(B・ホブソンによる中国語訳の西洋医学書で、1857年に日本で翻刻)、『原病各論』(松本良順訳1857)にも、骨相学関連の記述を見つけることはできなかった(因みに、『全体新論』(17丁)には、西洋世界において同時代に骨相学とも関連させて論じられた顔面角(facial angle)理論が、図入りで解説されていた)。継続した調査が必要である。資料として、宮下三郎『和蘭医書の研究と書誌』井上書店、



- 1997年を参照。
- 16 西周口授・永見裕記録「百学連環 第二編上」『西周全集』第4巻（大久保利謙編）宗高書房，1981年，151-152頁。「ガルの学は解剖を以て人の性理〔心理〕を得んと欲せし所なれとも，終に性理を得るに至らず」というのが西の「脳学」評であった。なお，「百学連環覚書」の第一冊（305・417頁）と第二冊（586頁）には，西手書きの「phrenology gall 脳学」等のメモが見える。
- 17 ヘンレ・キッドル&アレキサンドル・ジェー・スケム編『教育辞林』第11冊（木村一歩訳）文部省，1882年，2頁。同，第4冊（小林小太郎訳），1881年，38頁。
- 18 〔齋藤〕鉄軒『観相学—脳髓機能論，俗称骨相学』齋藤秀夫，1925年。
- 19 『和訳字彙—ウェブスター氏新刊大辞書』（F・W・イーストレキ&棚橋一郎訳，南條文雄増補）三省堂，1900年，769-770頁。因みに，同辞書はPhrenologyの訳語として「骨相学」も挙げていたが，何と，たった71個しかない「編中所用之略字」（Abbreviations），即ち本文中で用いる略語の一つに，「〔骨〕——骨相学」を採用していた（原綴は「phre., phreno.」）（なお，筆者が所属する兵庫教育大学附属図書館蔵書で他版の略語表を確認したところ，1937年刊行 *Webster's New International Dictionary of the English Language* にはなお「phre.」が採用されていたが，1976年刊行 *Webster's Third New International Dictionary of the English Language* ではもはや脱落していた）。これは，西洋世界のポキャブラリーにおいて，骨相学がいかに広汎な影響を及ぼしていたのかを思い知らされる例証であり，図らずも近代日本にまでそれが横溢した形である。
- 20 晴雲堂主人『実験応用 人心観相術』神易館，1909年，32頁。
- 21 〔イソップ〕『天草本伊曾保物語』（新村出翻字）岩波文庫，1939年，90-91頁。山下正男によると，「狐と野牛のこと」のお話の中の「あたまに智慧がある」という表現は，原典では“phrenを持つ”となっているとのこと（山下正男「魂と神についてのヨーロッパ的奇想」『人文学報』京都大学人文科学研究所，1994年，20頁）。
- 22 澁澤龍彦『私のプリニウス』河出文庫，36-37頁も参照。
- 23 Daniel Noble, “An essay on the application of phrenology to the investigation of the phenomena of insanity,” *The phrenological journal and miscellany*, vol.9, Edinburgh, 1836, pp.447.
- 24 伊地知英太郎・新宮涼園纂輯『袖珍医学辞彙』伊藤誠之堂，1886年，278頁。但し，見出し語は「Phrenologia」。
- 25 青木輔清『英和掌中字典』青木輔清，1873年，346頁。今回参照したNDLデジタルライブラリー版では「シング」とも読め，「ク」の脱字（すなわち「心学」）の可能性もある。
- 26 「談話—会長高橋邦三氏の最新生理心理学談」『京都商業学校同窓会報告』第3号，1899年6月25日，16-29頁。高橋邦三「生理的心性学」『一橋會雑誌』第40号，東京高等商業学校一橋会，1908年，92-94頁。
- 27 寶列爾『図解欧米人相学』（曾田愛三郎校閲，三橋村雄・江口武壽訳）東生鉄五郎，1885年。
- 28 堀養父彦『西洋人相学解剖説明全書』堀養父彦，1890年。
- 29 井上勝五郎『観相奇術』井上勝五郎，1890年。
- 30 石龍子『性相学精義』嵩山房，1902年。
- 31 コーム氏『性相学原論』（松軒翁訳）三星社，1917年。ただし，永峰自身は石龍子の語法とは異なり，法華経の「十如是」からその語を採ったという（保坂忠信『評伝永峰秀樹』リーベル出版，1990年，126-127頁）。即ち，曰く「是の如き相あれば，是の如き性あり」，「性とは心といふても差別はなし」，云々。因みに明治期，natural lawが「性法」と訳されたように，「性」は新奇な西洋的観念 nature を写し取る言葉の一つでもあった。human nature（人間の自然／本性）を読み解こうとする骨相学の訳語として，西洋知（科学）吸収に腐心した時代状況下で「性相」の語が選ばれたことは興味深い。なおこれらの言葉（思想）の翻訳を可能とした土台に，朱子学の「性理学」が存在したことについては，板東洋介「日本近世における人間本性論の角逐と帰趨」『工学院大学研究論叢』第53巻2号，2016年，105-117頁を参照。
- 32 佐藤正道『フレノロジー講義全書』大日本フレノロジー学館，1891年。
- 33 「フレノロジー術鑑定広告 清水多計男」東京朝日新聞，1891年11月12日朝刊，5頁。
- 34 多田盛大編『権道』第1号，権道学館，1892年。
- 35 大橋新太郎編『易占及骨相法』（日用百科全書41編）博文館，1900年。
- 36 粟根竹斎『性相と骨相運命学』太卜館，1916年。
- 37 岩川友太郎『生物学語彙』集英堂，1884年，168頁。
- 38 井上円了『骨相論』『妖怪学雑誌』第5号，妖怪学雑誌社，1900年，1-3頁。
- 39 糸左近『素人診断学』金刺芳流堂，1906年。
- 40 前島熊吉『東西骨相学と人相学の研究』荻原星文館，1931年。
- 41 この他にも，翻訳医学テキストにガルらの学説として「人心学」なる語も登場するが，残念ながら原語を特定することができなかった（律度羅〔リュドロー〕

- 『医学七科問答一生理学』（内務省衛生局訳）東京医学社，1879年，141頁。John Livingston Ludlow, *A manual of examinations*, new ed., Philadelphia: Blanchard & Lea, 1857)。
- 42 英国のものに限っても，科学史家 R・クーターがまとめた骨相学関連文献目録の厚さが，骨相学文献の大量を物語る (Roger Cooter, *Phrenology in the British isles: an annotated, historical biobibliography and index*, Metuchen: The Scarecrow Press, 1989, pp.431)。
- 43 Andrew Combe, *The principles of physiology: applied to the preservation of health*, 7th Edinburgh ed., New York: Harper & Brothers Publishers, 1855. 静岡県立図書館編『江戸幕府旧蔵図書目録（葵文庫目録）』静岡県立図書館，1970年，52頁。出版年と外国方設置時期から，本書が当時最新の専門書として輸入されたことが分かる。
- 44 石田德行「葵文庫の概要—江戸幕府旧蔵書のコレクション」『「しずおか」の貴重書』（伊豆文学フェスティバル実行委員会編）静岡県立図書館，2005年，3頁。
- 45 国立公文書館デジタルアーカイブ <<https://www.digital.archives.go.jp/>>，2019年10月25日閲覧可能。
- 46 八幡（谷口）彩子『明治初期における翻訳家政書の研究』同文書院，2001年を参照。
- 47 デジタルアーカイブの「簿冊情報」では出版年が「1832」になっているが，本書初版は1854年である。
- 48 帝国図書館編『帝国図書館洋書目録—哲学・心理・倫理・論理・教育』帝国図書館，1899年，102頁。ちなみに，司書の M・デューイが1876年に考案した図書の十進分類法において，その最初から“Phrenology”の分類項目 (Section) が設けられていた (Melvil Dewey, *A classification and subject index, for cataloguing and arranging the books and pamphlets of a library*, Amherst, 1876, p.14)。
- 49 帝国図書館編『帝国図書館洋書目録—政治・法律・経済・社会・統計』帝国図書館，1898年。同『歴史・伝記・地理・紀行』1898年。同『文学及語学』1900年。同『農業・商業・工学・美術・工芸・陸軍・海軍』1901年。同『理学・数学及医学』1903年。
- 50 平野亮「日本の教育事典に見るフレノロジー」『研究論叢』第22号，神戸大学教育学会，2016年，29-43頁。
- 51 橋本美保『明治初期におけるアメリカ教育情報受容の研究』風間書房，1998年，263-264頁。
- 52 Nelson Sizer, *How to teach according to temperament and mental development; or phrenology in the schoolroom and the family*, New York: S. B. Wells & Company, 1877. 同じく，同著者による「ホワット，ツー，ズー，エンド，ホワイ」(274頁)は，やはり表1にも掲載の *Choice of Pursuits* のこと。骨相学的に個性 (peculiarity) を診断し，適職を勧める内容が含まれる。
- 53 O. S. Fowler, *The practical phrenologist; and recorder and delineator of the character and talents*, New York: Eugene W. Austin, 1869. ファウラーの著作はもう一冊 *Creative and Sexual Science* (1875. 橋爪貫一訳『男女之義務』玉山堂，1879年) が抄訳されており，当時広く読まれたというが (唐権「『吾妻鏡』の謎—清朝へ渡った明治の性科学」2014年9月26日 (日文研フォーラム，275))，原著では比較的明快に記述される理論的支柱としての骨相学が，邦訳版では殆ど明らかではない。
- 54 所謂“ヨコをタテに”しただけの文献も少なくないのだろうが，今回は原書・著者を特定するには至らなかった。なお，近年の骨相学原書の邦訳業に，秋山巧氏が2016年に東北学院大学に提出した修士論文「ガルの骨相学について—コツェブー作『脳の器官達』を通じて見えてくる骨相学の姿」に添付の，A. von Kotzebue, *Die Organe des Gehirns*, Leipzig, 1806の全訳がある。
- 55 登場する人名表記や訳語，文章・構成が類似ないし一致する佐藤正道口述『フレノロジー講義全書』（大日本フレノロジー学館，1891）が底本であろう。
- 56 東京朝日新聞，1895年10月23日朝刊，5頁。
- 57 巖谷季雄編『少年世界』第4巻13号，1898年6月1日，広告。なお，天野祐吉『また，嘘八百！！—広告ノ真髓トハ何ゾヤ？〈明治篇〉』（文春文庫，1992年，17頁）には，第3巻9号（1897）掲載の同広告が紹介されている。
- 58 帝国図書館編『帝国図書館和漢図書分類目録』帝国図書館，1904年，274-276頁。帝国図書館編『帝国図書館和漢書件名目録』帝国図書館，1905年，212・381頁。
- 59 南方熊楠『南方熊楠日記4 1911-1913』（長谷川興三校訂）八坂書房，1989年，208頁（1912年11月12日分）。
- 60 芥川龍之介「田端日記」『芥川龍之介全集』第2巻，岩波書店，1995年，265頁（1917年8月27日分）。
- 61 小林一三『小林一三日記』第1巻，阪急電鉄株式会社，1991年，129頁（1903年12月10日分）。
- 62 「豆えん筆」読売新聞，1917年4月12日朝刊，5頁。
- 63 成瀬無極「骨相学者」『偶然問答』大鏡閣，1925年，177-185頁。
- 64 「隣の噂」読売新聞，1914年7月6日朝刊，2頁。
- 65 井上通泰『南天荘雑筆』春陽堂，1930年，446-449頁。
- 66 福沢諭吉『福翁百話』時事新報社，1897年，382-383頁。
- 67 新渡戸稲造「セルフメージュアメント—人物評価法としての各種の相法」『実業之日本』第20巻3号，大日本實業學會，1917年，16-19頁。

- 68 王充『論衡』, 中国哲学書電子化計画 <<https://ctext.org/lunheng/gu-xiang/zh>>, 2019年10月25日閲覧可能。諸橋轍次『大漢和辞典』（修訂版, 第12巻, 1988年）の「骨相」の項（570頁）も参照。
- 69 菊地真『『大鏡』高麗相人攷一本のないブックロード』『奈良・平安期の日中文化交流—ブックロードの視点から』（王勇・久保木秀夫編）農山漁村文化協会, 2001年, 317-331頁。
- 70 『懐風藻』（江口孝夫全訳注）講談社学術文庫, 2000年, 53頁。菊地（前掲書）によると, 日本の王朝物語では「外国相人」が「物語の展開を決定づける重要な箇所」に登場し王朝を権威づける, というシーンが典型的に描かれるという。このあたり, 近代日本が西洋科学文明に求めたものと変わるところはなさそうである。
- 71 藤原博之「論運命」『本朝文粹 註釈上冊』（藤原明衡編・柿村重松註釈）内外出版, 1922年, 405-425頁。
- 72 神宮司庁古事類苑出版事務所編「方技部八一観相」『古事類苑』神宮司庁, 1896-1914年, 561-610頁。
- 73 心理学者の小熊虎之助は, 鍼灸の経穴学における頭部のツボの「玉枕図」を指して, 「東洋の骨相学」と呼んでいる（小熊虎之助『心理学概観』上巻, 太陽堂, 1936年, 151頁）。そのような知の系譜をここに含めるのもよいのかも知れない。
- 74 橋家圓喬「三味線栗毛」『落語五人全集』（尚武軒主人編）丸亀書房, 1925年, 186-206頁。因みに, 三遊亭遊三（1881年生。岡田則夫編『二代目三遊亭遊三落語全集』日外アソシエーツ, 2018年）や三遊亭小圓朝（1892年生。飯島友治編『古典落語』第2巻, 筑摩書房, 1968年）の速記録では「骨組」となっている。
- 75 「流行もの二題」東京朝日新聞, 1912年10月21日朝刊, 5頁。書誌研究者・森銑三の『明治東京逸聞史』（第2巻, 東洋文庫, 1969年, 433頁）にも引かれている。
- 76 石井研堂「西洋人相見」（第7編 教育学術部）『明治事物起源』改訂増補版, 上巻, 春陽堂, 1944年, 523頁。
- 77 齋藤鉄軒『人相読性術』洗心堂, 1918年, 40-41頁。
- 78 「骨相学図解用としての人物写真」『写真新報』第86号, 写真新報社, 1905年11月, 1-2頁。
- 79 「(広告) 科学と骨相学」東京朝日新聞, 1913年11月27日朝刊, 7頁。
- 80 高橋邦三「写真にて観たる本誌愛読者某君の心性力」『商工世界太平洋』第7巻18号, 博文館, 1908年9月, 60-62頁。
- 81 喜安朗編『ドーマエ風刺画の世界』岩波文庫, 2002年, 60頁。
- 82 小松佳代子「骨相学と教育—G. Combeの教育論を中心に」『大人と子供の関係史 第三論集』大人と子供の関係史研究会, 1998年, 82-83頁。関連して, 高山宏『パラダイムヒストリー—表象の博物誌』（河出書房新社, 1987年）の第3章も参照。
- 83 ジンメル「大都市と精神生活」『近代アーバニズム』（松本康訳）日本評論社, 2011年, 1-20頁。
- 84 Robert Proctor, *Racial hygiene: medicine under the Nazis*, Harvard University Press, 1988, p.11.
- 85 岩井洋『記憶術のススメ』青弓社, 1997年, 93頁。
- 補遺) 本論文は, 平成31年~令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金「近代日本における〈骨相学〉の受容と展開に関する教育史的研究」（研究代表者: 平野亮, 19K14063, 若手研究）の研究成果の一部である。